

序 章 「シカゴ学派」の社会学…………… 1

第1章 都市の発展とシカゴ社会学…………… 7

1 シカゴの発展 7

中西部の大都市シカゴ 7 シカゴの誕生 8 初期シカゴの発展 9 シカゴ大火 11 新しい

移民の波 11 コロンビア博覧会 12 労働運動と社会改革運動 13

2 シカゴ大学と社会学科 14

シカゴ大学 14 初代学科長アルビオン・スモール 16 W・I・トマスと『ポーランド農民』 18

一九一〇年代の世代交代 20

3 都市の成長とシカゴ社会学 21

第2章 黄金期のシカゴ社会学…………… 24

1 ロバート・パークと「都市」 25

プラグマティズム、ジャーナリズム、人種問題 25 パークの「都市」 27 都市へのまなざし 28

	都市と近隣地区	29	近代都市と社会的分業	30	第一次的關係と第二次的關係	33	マシン政治と
	改革政治	34	気質と都市環境	37	パーク「都市」の読み方	39	
2	同心円地帯理論	40					
	五重の同心円構造	41	シカゴの同心円構造	42	都市拡大の動態	44	調査方針としての同心円地帯理論
	シカゴ・モノグラフ	47					
3	シカゴ・モノグラフ	47	パークとバージエスの指導体制	47	アンダーソンの『ホーボー』	48	マウラーの『家族解体』
	スラッシュャーの『ギヤング』	58	『ゴールドコーストとスラム』	62	ワースの『ゲッター』	67	シカゴ・モノグラフの理論と方法
	カゴ・モノグラフの理論と方法	71					
4	「生活様式としてのアーバニズム」	74					
	(1) アーバニズム理論の構造	74	都市と「生活様式としてのアーバニズム」	74	空間的凝離	77	
	都市的社會關係と都市的パーソナリティ	79	分業の発達と大衆化	79			
	(2) アーバニズム理論の批判	82	従属変数に関する批判——コミュニティは解体したか？	82	独立変数に関する批判——都市の効果は存在するか？	83	都市化の理論としてのアーバニズム理論
	(3) アーバニズム理論の政策的含意	87					
5	シカゴ社会学の黄昏	88					
第3章	社会学のパラダイム転換——構造—機能主義・計量革命とシカゴ学派	90					
1	構造—機能主義の台頭	91					
	(1) パーソニズムの構造—機能理論	91	タルコット・パーソニズム	91	社会的行為の構造	92	構造—機能分析——行為の一般理論と社会体系論
			AGILE図式	100			

	(2) 構造—機能主義の拡張	107	中範囲理論と不均衡理論—R・K・マートン	101	集合行動の理論
	—N・J・スメルサー	103			
2	計量革命	107			
	計量革命とシカゴ社会学	107	ラザースフェルドとコロンビア大学社会学科	109	とどめの一撃—生態学的誤謬
	111				
3	社会学の危機と「シカゴ学派」	113			
	「シカゴ学派」の予兆—一九五〇年代の危機	113	シカゴのコロンビア化とシカゴ学派のディアスポラ		
	115 「シカゴ学派遊撃隊」とフルーマー—ヒュース・トーク	118	反構造—機能主義・反計量派としての「シカゴ学派」	127	
1	都市生態学的发展	130			
	起点としての人間生態学	130	セクター理論	131	多核心理論
	134 分析と因子生態学		都市生態学の限界	138	
2	地域コミュニティの持続と変容—修正シカゴ学派	139			
	コミュニティ新聞と有限責任のコミュニティ	139	サウスシカゴのブルーカラー・コミュニティ	143	
	シンボリック・コミュニティ	147			
3	シカゴ学派とハーバード構造主義の交差	152			
	ハーバード構造主義の形成	152	「コミュニティ問題」	155	アーバニズムの低位文化理論
	159 文化理論の定式化		低位文化理論の検証—北カリフォルニア調査	165	アーバニズムと社会的ネットワーク—北カリフォルニア調査の評価
	170		170		171
			ハーバード構造主義とシカゴ学派		

第5章 都市社会学と社会理論Ⅱ——ネオ・マルクス主義の台頭………

- 1 アンリ・ルフェーヴル——「都市革命」への道 174
 - 自由奔放なマルクス主義者 174 『コミュニオン宣言』 176 ナンテールから「都市革命」へ 177 都市
 - プロブレマティック 178 工業社会から都市社会へ 178 政治都市—商業都市—工業都市 180 分析
 - の三水準 182 都市革命 182 ルフェーヴル「都市革命」論の意義 184
- 2 ルイ・アルチュセール——構造派マルクス主義者の理論的冒険 186
 - 反ヒューマニズムの理論主義者 186 『マルクスのために』と『資本論』を読む 187 マルクスはい
 - つから「マルクス主義者」となったのか? 188 マルクスは「弁証法的唯物論」を書かなかった 189
 - 理論的実践としての認識の生産 190 「認識の対象」と「実在の対象」 191 支配的な構造をもつ分節化
 - された複合体 194 アルチュセールのその後 198
- 3 マニユエル・カステル——集合的消費と都市社会運動 199
 - カステルの軌跡——アルチュセール派マルクス主義からの出発 199 都市イデオロギー批判 200 都市
 - システム 203 先進資本主義における集合的消費と都市社会運動 204 初期カステルの評価 206
- 4 デヴィッド・ハーヴェイ——資本の都市化と都市革命 208
 - 英語圏でのマルクス主義の台頭 208 経済地理学からマルクス主義へ 209 資本主義のもとでの都市化
 - 210 資本の生産過程 211 資本の流通過程 215 資本循環のモデル 218 帝国主義と「略奪」による
 - 蓄積 222 「都市への権利」から「都市革命」へ 223 ハーヴェイの強みと弱み 226
- 5 「シカゴ学派」への挑戦 227
 - 「シンポジウム——マルクスと都市」 227 都市の一般理論は存在しない——クラークの答え 230 共有
 - すべきはワースの問い——フィッシャーの答え 231 アルチュセール批判——ピックヴァンスの答え 232
 - マルクス主義はブルジョア科学の解釈枠組みである——ハーヴェイの答え 233 都市エスノグラフィを

めぐって——ブラウンとベンスマン 236
中範囲の諸問題 239
論争がもたらしたもの 240

終章 「シカゴ学派」とは何か

243

1 歴史としての「シカゴ学派」 243

2 「シカゴ学派」とは何か 245

3 都市研究と社会理論 260

シカゴ学派の「神話」? 252

シカゴ学派とL A 260
革命か改革か 264

あとがき 267

参考文献 284

索引 294

序章 「シカゴ学派」の社会学

今日、社会学は、フィールドワークや統計的調査によって直接データを収集し分析することをつうじて社会の諸側面を科学的に研究する学問であるというイメージが定着している。しかし、一九世紀の社会学の創始者たち——オーギュスト・コント、ハーバート・スペンサー、カール・マルクス、フェルディナント・テンニエス、エミール・デュルケム、ゲオルク・ジンメル、マックス・ヴェーバー——は、歴史資料や公的統計、新聞や雑誌を参照したかもしれないが、今日的な意味での社会調査はほとんどやらなかった。社会学が、今日のように調査データにもとづく経験科学に転換したのは、二〇世紀初頭のシカゴにおいてであった。

一八九二年に、ロックフェラーの寄附をもとに開学したシカゴ大学は、米国で最初の本格的な研究大学で、なによりも地元シカゴの都市問題を研究することを使命としていた。シカゴは、一九世紀後半の米国産業革命の過程で、急速に成長した「前例のない」大都市であった。ヨーロッパから移民が集まり、貧

困問題や民族問題、犯罪・非行などの社会問題が集積して、社会改革が求められていた。シカゴ大学は、世界で初めて社会学の博士学位を出す社会学科を開設し、社会改革運動のただなから、都市問題の研究をおして、経験科学としての社会学を育て上げていった。その成果が量産されるようになったのが一九二〇年代から一九三〇年代にかけての時期であった。ロバート・パークというカリスマ的な指導者のもとで、大学院学生たちがシカゴの街の調査に取り組み、渡り労働者、家族解体、自殺、ギャング、スラム、ゲットー、少年非行、犯罪などの研究で成果を挙げていったのである。こうして、当時のシカゴ大学社会学科は、米国の社会学を牽引する位置にあった。今日、この時代のシカゴ社会学の研究実践は、「シカゴ学派」の社会学と呼ばれている。

一九三〇年代も半ばを過ぎると、さしものシカゴ社会学にも陰りが見えてきた。その背景には、ロバート・パークの退職、他大学の追い上げによる学会での力関係の変化などさまざまな

理由が考えられるが、最も大きな理由は、構造―機能主義の台頭による社会学理論の刷新と計量研究の発展による新しい調査方法の標準化によって、社会学のパラダイムが転換したことにあった。そのため、構造―機能主義の提唱者であるタルコット・パーソンズのいるハーバード大学と、計量研究の旗手であるポール・ラザースフェルドのいるコロンビア大学が、社会学の拠点として最先端に躍り出たのである。シカゴ大学は、一九二〇年代の黄金時代の経験者が一九五〇年代初頭にさまざまな事情で消え去ることにより、シカゴ社会学の伝統が途切れることとなった。裏を返せば、このときまで、シカゴ大学社会学科は新しい動きに対応できなかったとも言える。

構造―機能主義と計量研究の組み合わせという社会学の新しいパラダイムは、一九六〇年代半ばまで続いたが、六〇年代後半の学生反乱の時代に揺らいだ。このとき、シンボリック相互作用論と質的研究の「シカゴ学派」という神話がつくられた。かつて社会学の主流であったシカゴ社会学は、反主流派としての役回りを演じるようになったのである。ところが、そもそもシカゴ社会学の原点にあった都市研究の分野では、ネオ・マルクス主義の都市研究がフランスで台頭し、一九七〇年代に英語圏に持ち込まれた。ここでは、ネオ・マルクス主義者が、「シカゴ学派」の都市社会学を主流派と見立てて挑戦状をつきつけ

た。一九七〇年代までに独自の進化を遂げていた都市社会学は、「シカゴ学派」を擁護する立場に立たされたのである。

こうした論争的な文脈のなかで、さまざまな「シカゴ学派」像が語られるようになる。このとき、「シカゴ学派」とはなんであったのか、その今日的意義は何かがあらためて問われるようになった。一九七〇年代から九〇年代にかけて、英語圏では、シカゴ学派についての研究が急速に蓄積されていった。こうした動向を受けて、日本でも、鈴木・倉沢・秋元編（一九八七）や秋元（一九八八・二〇〇二）など都市社会学の視点からのシカゴ学派研究があらわれ、宝月・中野編（一九九七）、中野・宝月編（二〇〇三）、宝月・吉原編（二〇〇四）など一九二〇年代―三〇年代のシカゴ社会学の成果を多角的に解説する研究が続いた。これらの研究のほとんどは、シカゴ社会学の黄金時代やそこにいたる時期に発表された研究成果のテキストを解説することに集中していた。これに対して英語圏の研究は、シカゴ大学リーゲンシュタイン図書館のアーカイブに所蔵されている手紙や議事録などの資料を活用して、シカゴ社会学のメンバーの実践そのものを解明しようとするところまで進んだ。それはたしかに「社会学史」ではあるものの、「学説史」にとどまるものではなく、制度史であり、知的実践の歴史社会学であった。われわれは、そうした最先端の研究に遅れずについていくのがやっとなのである。

本書は、こうした内外の最先端の研究に学びながらも、時代とともに繰り返し回顧的に再構築される「シカゴ学派」の姿を、構造―機能主義やネオ・マルクス主義など他の理論的パラダイムとの関係において捉え、主たる焦点を都市研究に合わせる中級者向け教科書としてまとめてみたものである。「シカゴ学派」の言及対象は、一九二〇年代―三〇年代のシカゴ社会学にあるものの、「シカゴ学派」をめぐる物語は、むしろ一九六〇年代以降に紡ぎ出され、都市研究の分野では二一世紀に入っても継続している。なぜ不死鳥は飛び続けているのか。その含意を探ることが本書の目的である。

本書はつぎのような構成をとっている。第1章では、「シカゴ学派」の黄金期にいたるまでの前史として、二〇世紀初頭までのシカゴの発展、シカゴ大学の設立経緯、初代学科長アルビオン・スモールの実践と、シカゴ社会学発展の跳躍台となったトマスとズナニエツキの『ポーランド農民』の意義、そして一九一〇年代の世代交代について概観する。シカゴ社会学の理解にとって、都市と大学に関する歴史的背景を踏まえることは必須である。

第2章は、一九二〇年代―三〇年代にかけての黄金期のシカゴ社会学について扱う。ここではまず、当時の指導者であったパークの論文「都市」とパージェスの同心円地帯理論を踏まえ

たうえで、「シカゴ・モノグラフ」と呼ばれる大学院学生の研究成果をいくつかつりあげて、その特徴を見ていく。次に、黄金期からはやや外れるが、都市研究にとって避けることのできないワースのアーバニズム理論についてやや立ち入った検討を加える。この章の最後は、一九五〇年代初頭に向かってのシカゴ社会学の衰退について概観する。パージェス、オグバイン、ワース、ブルーマーがシカゴの舞台から姿を消す一九五〇年代初頭のシーンは、続く諸章でも何度か立ち返ることになる。

第3章は、シカゴ社会学の衰退と再評価の双方に深くかわる構造―機能主義の台頭と経験的研究における「計量革命」について扱う。パーソンの構造―機能理論は、近年では取り上げられることが少なくなってきたものの、現代社会学の標準的な語彙を整備した点では、今日まで生き続けている。また、マーソンの準拠集団理論やアノミー論、そしてスメルサーの集合行動論をとりあげることによって、シカゴ社会学が扱ってきた社会心理学や計量研究、とくに逸脱行動や集合行動などのテーマが、機能主義の理論に組み込まれることで、シカゴ社会学を圧倒するパラダイム転換がなされたことを確認する。

構造―機能主義がシカゴ社会学の外部で発展したのに対して、計量革命は、シカゴの内部にもその予兆があった。しかし、地域単位の生態学的相関にもとづくシカゴ流の計量研究は、個人

単位のデータにもとづく個人相関を扱うラザースフェルド流の計量研究に凌駕されていく(生態学的相関の評価は、本書が重視するポイントのひとつである)。第3章の最後は、構造・機能主義と計量研究の台頭によって押され気味であったシカゴ社会学が、一九六〇年代後半になって反構造・機能主義・反計量派の「シカゴ学派」として構築されていく過程を一九六九年のエピソードから見ることにする。

第4章と第5章は、一九七〇年代に相まみえることになる都市研究の三つの潮流について扱う。このうち第4章は、「シカゴ学派の伝統のもとにある」シカゴの地域コミュニティ研究と、ポスト・パーソンズ世代のハーバード構造主義と「シカゴ学派」との交差をとりあげる。まず、バージェスの同心円地帯理論以降の都市生態学の発展を概観したうえで、地域コミュニティの「衰退」ではなく、「持続と変容」を基本テーマとする一九七〇年代のシカゴの地域コミュニティ研究を紹介する。これらの研究は日本では十分消化されていないものの、第5章の最後で扱うネオ・マルクス主義との論争でもとりあげられ、さらに終章で示唆する現代の地域コミュニティ研究に連なるものがある。われわれは、「修正シカゴ学派」という見出しでこの一連の研究を扱うことにする。

第4章の後半は、シカゴ学派とハーバード構造主義の交差と

題して、都市コミュニティ研究へのネットワーク分析の導入と、とくにフィッシュヤーの都市下位文化理論に立ち入った検討を加える。フィッシュヤーもまたワースの仮説に重大な修正を加えつつも、都市の生態学的効果を下位文化の形成に求めている点で、ロバート・パークのアイデアを踏襲している。また、フィッシュヤーは、第5章の最後で扱うネオ・マルクス主義都市論との論争で鍵となる役割を果たしている。

第5章は、一九六〇年代後半以降のネオ・マルクス主義の台頭と「シカゴ学派への挑戦」について扱う。ネオ・マルクス主義については手頃な解説書がなく、なじみのない読者も多いと思われるので、やや紙幅をとって基礎的な概説を加えることにした。ここで扱うのは、アンリ・ルフェーヴル、ルイ・アルチュセール、初期のマニエル・カステル、そしてデヴィッド・ハーヴェイである。

ルフェーヴルは、自由奔放なマルクス主義者であるが、「資本の第二次循環」や近年では「都市への権利」「都市革命」などのアイデアで、ハーヴェイに影響をあたえている。ここでは、ルフェーヴルのスターリン主義批判や五月革命との関連を織り込みながら、「都市革命」論の輪郭を描き出す。

アルチュセールは哲学者であって、都市研究とは直接関係がないものの、初期のカステルがアルチュセールの認識論に依拠

していたため、初期カステルを理解するために避けて通ることはできない。また、この章の最後で扱うシカゴ学派への挑戦のシーンでは、英国のマルクス主義者ピックヴァンスがアルチュセール批判を展開している点にも留意した。

カステルについては、「集合的消費」と「都市社会運動」を軸としていたパリ時代の軌跡を追う。ここでは、彼の「都市イデオロギー」批判を、アルチュセールの認識論との関連で理解する一方で、この時期の彼の理論の実践的含意をユーロ・コミユニズムとの関連で示唆したい。

ハーヴェイは経済地理学を背景としているので、都市社会学批判とのかわりは間接的であるものの、彼にとつては初期の段階で、シカゴ学派への挑戦のシーンに登場する。ハーヴェイの理論の解説としては、「資本の第二次循環」と近年の「都市革命」論に焦点をあてることにする。

この章の最後は、一九七八年の『比較都市研究』誌上でなされたネオ・マルクス主義者と「シカゴ学派」の論争のシーンをとりあげる。論争は、イデオロギー的批判を脇において、中範囲理論の水準で、「シカゴ学派」の主張する都市の生態学的効果を認める一方で、都市研究における政治経済学的視点の重要性が確認された。これらの議論をとおして、都市社会学の分野では、「シカゴ学派の都市社会学」は正統派のシンボルとなっ

た。

終章では、本書で展開してきた「シカゴ学派」の物語をふりかえり、あらためてシカゴ学派とは何かを考察する。学派とは、学問的な専門分野の内部で、独特の研究スタイルを共有し、研究過程と研究成果を共有する社会的ネットワークをもち、その成員が帰属意識をもち、および／または外部からその存在が認識されている研究者の集団である。「シカゴ学派」は一九二〇年代には、米国社会学をリードする研究者集団であったが、支配的地位を占めていたためにかえって「学派」としてのアイデンティティはもちえなかった。「シカゴ学派」というシンボルが定着するのは、一九六〇年代になってからである。パラダイム転換によって生じた新たな文脈のもとで、シカゴ社会学は「学派」としての独自性が認識されるようになった。本書では、シンボリック相互作用論と質的研究の「シカゴ学派」という「神話」の批判的検討をつうじて、「シカゴ学派」の特徴を、(1)社会改革主義のプロブレマティックのもとで科学としての社会学をめざす科学的改革主義、(2)計量的研究と質的研究を併用し多様なデータを駆使するマルチ・メソッドのアプローチ、(3)社会過程を空間的文脈において捉え、マクロ・レベルの生態学的効果に独自の理論的意味を認めるマルチ・レベルの分析、そして(4)これらをつうじての理論と調査と政策提言の密接な結合に

求めたい。

最後に、現代における「シカゴ学派」的アプローチの実践例として、二〇〇二年に『都市とコミュニティ』誌で展開されたL A学派との論争を一瞥する。ここでもまた、自称L A学派が「シカゴ学派」に挑戦する形をとっているが、いまや「シカゴ学派」の意味は、一九七八年よりもずっと明確になっている。

この論争の解説をつうじて、現代の都市研究における「シカゴ学派」的アプローチの意義を確認することができる。さらに、このアプローチの実践的含意を明確にするために、デヴィッド・ハーヴェイの「都市革命」論と対比させながら、資本主義の民主的統制に向けての「科学的改革主義」の可能性を示唆したい。

* 英語文献の直接引用のうち、原書の引用ページと邦訳の引用ページが併記されている場合、引用者は原書を参照してしばしば訳文を変えてある。

第1章 都市の発展とシカゴ社会学

都市の社会学的研究が始まったのは、二〇世紀初頭のシカゴにおいてであった。シカゴは、一九世紀後半の産業革命による産業資本主義の発展を背景に急速に成長した。この歴史的・空間的文脈を理解することなくシカゴ社会学を理解することはできない。本章では、シカゴ社会学の舞台としての大都市シカゴがどのように成長してきたのか。そしてそのなかで、シカゴ社会学がどのように生み出されてきたのかを見ていく。

1 シカゴの発展

中西部の大都市シカゴ

シカゴは、米国中西部、ミシガン湖畔にある大都市である。二〇一〇年時点でのシカゴの人口は約二七〇万人、全米でニューヨーク、ロサンゼルスに次いで第三位の人口規模を誇っている。米国の都市には、しばしばニックネームが付けられている。ニューヨークはBig Apple、ロサンゼルスはBig Orange。シカゴはWindy Cityと呼ばれている。Windyとは、直接的には「風が強い」という意味をもち、それゆえWindy Cityは、「空っ風の街」を意味すると一般に受け取られている。たしかに、

ミシガン湖畔にあるシカゴは、風が強い。しかし、Windyには「口先だけの」「ほら吹き」という意味があり、サトルズによればWindy Cityの由来は、一九世紀後半、シカゴが急成長する過程で山師のようなリーダーが集まってきたことから来ているという(Sutles 1990, p. 7)。シカゴの経済発展を見込んで、大言壮語するリーダーたちを、当時の人びとは「おおほら吹き」とみなしたのであろう。しかし、シカゴは実際に急成長を遂げ、一八九〇年にはニューヨークに次いで人口規模で全米第二位に躍り出て、the Second Cityと呼ばれるようになった。一九九〇年のセンサスでロサンゼルスに抜かれるまで、約一世紀のあいだ、シカゴは全米第二の大都市であった。

またシカゴは、the City of Neighborhoodとも呼ばれている。

観光ガイドブックなどでは「近所づきあいの街」と訳されている。シカゴが、*Neighborhood* (近隣地区) の街と呼ばれるようになったのは、第4章で後述するようにシカゴ社会学の都市研究と深い関連がある。そのほか、シカゴの絵はがきなどには、*My Kind of Town* (私好みの街) というフレーズが書かれていることが多い。*I Love New York* をスローガンとするニューヨークの熱狂に比べ、現在のシカゴには、洗練された街の落ち着きが感じられる。

シカゴの誕生

シカゴには、市民に共有された定番の誕生物語がある。これから述べる一九世紀後半までのシカゴの成長過程の大半は、「不都合な真実」を除いて、その物語に取り入れられている。シカゴの誕生物語の最初に出てくるエピソードは、一六七三年、フランス系カナダ人ルイス・ジョリエットとイエズス会の宣教師ジャック・マーケットがのちにシカゴと呼ばれる場所を通過したというものである (Mayer and Wade 1969, p. 6)。当時、まだアメリカは独立しておらず、北米大陸の中央部は未開の地であった。彼らの率いる探検隊は、北米大陸の発展の可能性を探るために、五大湖から中西部に入り、南下してミシシッピ川中流域にいたり、折り返してミシシッピ川を北上して、シカゴ川上

流に入り、シカゴ川に沿って、現在のシカゴの地にたどりついたようである。彼らはしばらくシカゴ川河口に滞在したのち、ミシガン湖岸に沿ってカナダ方面に帰っていった。この話は、ヨーロッパ人がはじめてシカゴの地を訪れたエピソードとして、シカゴ市民に広く知られている。現在、シカゴ川にかかっているノースミシガン通りの橋の欄干には、ルイス・ジョリエットとジャック・マーケットがカヌーを漕いで探検する様子を描いたタブレットが設置されている。

次のエピソードは、約一世紀後の一七七〇年代に、黒人の血を引く商人ポイント・デュ・セーブルが、シカゴ川河口のミシガン湖畔で、先住民と毛皮の取引を始めたというものである (Ibid., p. 8)。その後、この地は交易の拠点となって米国人が進出するようになり、一七九五年には、先住民がシカゴ川河口六マイル四方を連邦政府に割譲するグリービル条約が締結された。そして一八〇四年には、シカゴ川河口に最初のディアボーン砦が設置され、シカゴは西部開拓のフロンティアとなっていく。ディアボーン砦の存在も、シカゴ市民にはよく知られており、ディアボーン通りや高架鉄道のディアボーン駅として名称が残っているほか、砦があったとされるノースミシガン通りとワックカードライブの交差点付近には、砦の輪郭を示す真鍮の板が埋め込まれている。

索引

アルファベット

- AGIL 図式 (パーソンズ) 100-101
AJS →『アメリカ社会学雑誌』を見よ
ASA 反乱 88-89, 243, 250
ASR →『アメリカ社会学評論』を見よ
LA 学派 →ロサンゼルス学派を見よ

あ行

- アーバンイズム →都市度も見よ
——の低位文化理論 →低位文化理論を見よ
——と産業主義 83-84, 86
——と資本主義 83-84, 86
生活様式としての—— →「生活様式としてのアーバンイズム」を見よ
ポストモダン・—— 260-61
飽きの態度 78, 79
悪徳地区 30, 38, 42
アダムズ, ジェーン 14
あてはめ問題 101, 198, 203, 204
アノミー理論 102-103
アボット, アンドリュー 89, 113, 252, 260, 262, 264
『アメリカ社会学雑誌』(AJS) 17, 18, 27, 88, 244
『アメリカ社会学評論』(ASR) 88, 244
アリハン, ミラ 250, 251
アルチュセール, ルイ 186-98
イデオロギー的審級 194, 196
——とカステル 185, 200-204, 206-207, 208
経済的社会構成体 194-97
経済的審級 194, 196
経歴 186, 198
実在の対象 191-93, 233 →実在の対象
(カステル) も見よ
重層の決定 197
政治的審級 194, 196-97
土台と上部構造 194-96
認識の対象 191-93, 233 →理論の対象

- (カステル) も見よ
ピックヴァンスの批判 232-33
理論的实践 190-93, 198, 200, 233, 234
暗黒街 42, 63
アンダーソン, ネルズ 48-53, 65, 67, 71, 265, 266
経歴 50-53
——とスモール 52
——とパーク 52, 53
——とバージェス 52, 53
イーストヨーク (トロント) 157
イエール大学 14, 16
イタリア人 11, 22, 83, 134, 145
逸脱 38-39, 40, 99, 116-17, 158-59
逸脱行動 99, 117, 257n
イデオロギー的審級 194, 196, 204
因子生態学 136-38, 147-49
インナーシティ 84, 133, 149
ヴィンセント, ジョージ 18, 20, 249, 257
ヴェーバー, マックス 30, 91, 94-95, 240
ウェストエンド (ボストン) 83, 87
ウェルマン, バリー 155-57, 171
ウォーナー, ロイド 74, 89, 108, 114, 125
ウルマン, エドワード 132-33
エスノグラフィー 236-39, 241, 245, 254-55
エリー郡 (オハイオ州) 109-111
オグバーン, ウィリアム 73, 88, 89, 108, 112, 114, 119, 126, 244, 254, 255, 257

か行

- カーツ, レスター 251-52
改革政治 34-36, 64, 67, 72
階級 43, 44, 84-85, 110, 158, 206, 217, 240, 260
階級闘争 197, 198, 211, 226, 235, 237, 238
解体 →社会解体を見よ
下位文化 159-60, 164, 201, 207, 248
——への関与 169
道徳地域と—— 38-40

- 下位文化理論 37, 85, **158-72**, 185, 228, 232,
245, 256
アーバニズム 159
下位文化 **159-60**, 164
概要 158, 162
検証 165-71
定式化 159-65
社会統合 163-64
都市度 159, 165
非通念性 **159**, 161-62, 163, 164
解放された家族地区 54-55
科学的改革主義 5, 64, 72, 259, 266 →社会
改革主義も見よ
『科学としての社会学入門』（「グリーンパイプ
ル」） 47, 256
学生反乱 90, 113, 118, 152, 177, 209, 244
学派 245-49
過剰蓄積 215, 217-18, 220-21, 222, 226
空間的・時間的解決策（ハーヴェイ） **215**,
221, **222**, 223, 226
カステル, マニュエル 185, **199-208**, 245, 266
——とアルチュセール 185, 200-204, 206-
207, 208
経歴 199
実在の対象 201, 202 →実在の対象（ア
ルチュセール）も見よ
集合的消費 **204-206**, 207
情報の発展様式 208
都市イデオロギー 200-203
都市システム 203-204
都市社会運動 **206**, 207
理論の対象 201-202 →認識の対象（ア
ルチュセール）も見よ
家族遺棄率 **56**, 58, 107
家族解体 **53-58**, 107
定義 54, 56
家族周期段階 85, 158 →生活周期段階も見
よ
家族地区 54-56, 137
価値（構造-機能主義） 98, 99, 104-105
価値（シカゴ学派） 19-20, 57, 71, 88
価値（マルクス主義） 212
商品の—— 212
剰余—— 213
相対的剰余—— 214
特別剰余—— 214, 215n
労働力の—— 213
価値付加過程 104, 105-106
カリフォルニア大学パークレー校 89, 103,
106, 115, 155, 199
ガンズ, ハーバート 87, 156, 158, 164, 170,
232, 241, 266
アーバニズム理論に対する批判 83, 84-85
擬制資本 **219**, 222
基礎地図 48, 73, 107
北カリフォルニア地方 165
ギディングズ, フランクリン 16-17
規範 16, 40, **92-99**, 104, 105, 117, 154, 163
キャンバン, ルス 65, 249-50, 256
キャリアー, ジェームズ 253, 256
ギヤング **58-62**, 65, 237
居場所 59, 61
集団構造 60
——と地域コミュニティ 60-61
定義 **59**, 61
類型 59
凝離 **30**, 37-38, 77-79, 135-36
儀礼的無関心 116
近隣効果 170-71, 264, 266
近隣地区 29-30, 150-51, 167-68
近隣地区の街 7-8, 151-52
空間に言及する感情 134, 138, 150
クーリー, チャールズ 17, 33, 258
組合政治 144-45
クラーク, テリー 230-31, 260, 261-62, 263
クラーク大学 15
グラノヴェッター, マーク 154, 155
グランデッド・セオリー 71, 90, 115
グリークタウン 42, 54
「グリーンパイブル」 →『科学としての社会学
入門』も見よ
『経済学・哲学草稿』（マルクス） →「一八四
四年の草稿」も見よ
『経済学批判への序言』（マルクス） 194-95
『経済学批判要綱』（マルクス） 209, 210
経済的社会構成体 194-97
経済的審級 194, 196, 204
継承 **44-45**, 64, 88, 131
計量革命 107-113
——とシカゴ社会学 107-109

定義 107
 批判 111
 計量研究 5, 73, 90, 111, 127, 255, 258, 259
 下宿屋街 42, 54, 63
 ゲゼルシャフト 31, 99, 141
 ゲッター 30, 43, 46, 54, 67-71
 回帰 68, 69, 70
 解体 69, 70, 71
 起源 67-68
 制度化 68
 存続 69, 71
 ゲメインシャフト 31, 99, 141, 142, 157
 建造環境 210, 219, 220, 221, 222, 226, 234
 行為体系 95, 97, 98, 100-101, 105
 郊外 11, 42, 84, 135, 148, 165, 170, 180, 208
 パリの—— 177, 181, 205
 公衆 35, 36, 40, 81, 106
 交渉による結集 145, 146, 238
 構造-機能主義 91-107, 112, 127, 244, 258
 AGIL 図式 100-101
 逸脱 99, 117
 価値 98, 99, 104-105
 規範 92-99, 104-105, 117
 行為体系 95, 97, 98, 100-101, 105
 構造-機能体系 97-98
 構造-機能分析 97-99
 社会化 97, 99
 社会体系 97-99, 100-101
 社会統制 99, 104, 106, 117
 社会変動 99
 パーソンズの—— 91-101
 構造-機能体系 97-98
 構造-機能分析 97-99
 公民権運動 146, 209, 238
 功利主義 92, 93, 227
 ゴールドコースト (シカゴ) 30, 62-63, 64,
 65, 67, 134, 266
 『ゴールドコーストとスラム』 54, 62-67
 コンプルム, ウィリアム 139, 143-46, 236,
 238-39, 241, 245
 五月革命 (パリ) 177, 182-83, 245
 ゴスネル, ハロルド 112, 125
 ゴッフマン, アーヴィング 115-16, 254
 コミュニティ →地域コミュニティも見よ
 ——解放論 156-57, 171

——衰退論 30, 83, 142, 170, 171
 ——喪失論 155-56
 ——存続論 30, 83, 156, 157, 170, 171
 ——問題 155-57, 171
 有限責任の—— 141-42, 151, 152
 コミュニティ新聞 139-42
 コロンビア大学 16-17, 26, 89, 90, 101-102,
 109, 118, 112-13, 114-15, 118, 230, 244, 254
 コロンビア博覧会 12-13
 さ行
 サーストン, L. L. 108, 121
 ザイゼル, ハンス 111
 再組織化 →社会解体-再組織化を見よ
 サウスシカゴ 132-33, 143-46, 238-39
 サッセン, サスキア 260, 261, 263
 サトルズ, ジェラルド 139, 156, 228, 236, 237,
 238, 239, 241, 245
 サムナー, ウィリアム・グラハム 16, 47
 サンドバーク, カール 11-12, 15
 サンブソン, ロバート 260, 262-63, 264, 266
 サンフランシスコ 135, 136, 165
 ジェイコブズ, ジェイン 87
 シェヴキー, エシユレフ 134-36
 ジェームズ, ウィリアム 25, 26-27, 28, 47,
 257, 259n
 シカゴ
 移民 10-11, 12, 22, 42, 44, 45, 60-61, 69,
 71, 144
 家族地区 54-55, 56, 107
 起源 8-9
 近隣地区の街 7-8, 151-52
 グリークタウン 42, 54
 ゲッター 42, 43, 46, 54, 69
 建築 11, 15
 工業化 9-11
 ゴールドコースト 30, 62-63, 64, 65, 67, 134,
 266
 コミュニティ新聞 139-42
 コロンビア博覧会 12-13, 41
 サウスシカゴ 132-33, 143-46, 238-39
 社会改革運動 14, 15, 17, 20, 253
 人口 7, 9-10
 大火 11
 タワータウン 63, 64

- 地域コミュニティ区域 48, 73, 140, 143,
147-52
- チャイナタウン 42, 54
- 同心円構造 42-43
- 都市化 9-14
- ニア・ノースサイド 62-67, 134
- ハイドパーク 14
- ハイドパーク=ケンウッド地区再開発計画
87, 113
- ビルゼン 42
- ブラックベルト 42, 144
- ブルマン 13-14
- ボヘミア 54, 63, 64
- ホボヘミア 42, 48-49, 50, 52, 54, 63
- マシン政治 145, 146
- マックスウェル街 43, 69
- ラテン街 42
- リトル・シシリー 42, 54, 63, 64
- ループ 41, 54, 59, 62
- 労働運動 13-14
- 『ローカルコミュニティ・ファクトブック』
131, 138, 151
- ローンデール地区 43, 69
- シカゴ学派 1, 89, 90, 113-14, 117-18, 121, 123,
124-25, 127-28, 243-266
- アイデンティティ 249-52
- とエスノグラフィー 236-39, 241, 245,
253, 254-55
- 黄金期 24-74
- カステルの批判 200-202
- と質的研究 90, 113, 114, 117, 127, 253,
254-55, 258-59
- と質的調査 27, 46, 108, 254-55
- と社会改革 5, 14, 15, 17, 22-23, 36, 39,
40, 57, 60, 63, 64, 66-67, 72, 88, 239, 253-54,
259, 264-66
- 社会統制 33, 36-37, 56-57, 106, 254, 257,
266
- 修正—— 4, 139-152, 170, 171, 241
- とシンボリック相互作用論 113, 114,
117, 127, 245, 253, 257, 258-59
- 神話 252-59
- 衰退 88-89, 244
- 第二次—— 117-18
- 都市社会学 74, 128, 129-130, 227, 241
- とハーバード構造主義 171-72
- 反構造-機能主義・反計量派としての——
127-28
- とロサンゼルス学派 260-64
- シカゴ学派遊撃隊 118-19, 251
- シカゴ大学 1, 14-15, 21-22, 87, 118, 257, 262
→シカゴ大学社会学科も見よ
- シカゴ大学社会学科 243-44, 246, 250
- 開設 16, 22
- コロンビア化 115, 126, 139
- 自己評価研究 89, 113-14, 125
- と人類学科 125, 257
- 1910年代の世代交代 20-21
- パークとバージェスの指導体制 47-48
- シカゴ大学出版会 15, 18, 48, 88-89, 139, 235n
- シカゴ派建築 11
- シカゴ・モノグラフ 48, 62, 65, 70, 71-73
- と提言 5, 72, 253, 254, 259, 264
- とデータ 72-73
- と方法論 72-74
- と理論 71-72, 253, 255-57, 259, 262
- 自己評価研究 89, 113-14, 125
- システミックモデル 142-43
- 自然史 59, 61, 68, 69, 70, 105
- 実在の対象 (カステル) 201, 202 →実在の
対象 (アルチュセール) も見よ
- 実在の対象 (アルチュセール) 191-93, 233
→実在の対象 (カステル) も見よ
- 実証主義 92, 93-94
- 質的研究 90, 113, 114, 117, 127, 253, 254-55,
258-59
- 質的データ 72-73
- 史的唯物論 187, 190, 191
- 支配 (人間生態学) 44-45, 88, 131
- 資本主義的生産様式 181, 184, 195, 196, 211
- 資本蓄積 210-11, 226-27
- 資本の生産過程 211-15
- 資本の第三次循環 (ハーヴェイ) 222
- 資本の第二次循環 181n
- ハーヴェイ 218-22
- ルフェーヴル 181, 184, 185
- 資本の有機的構成 205, 214
- 資本の流通過程 215-18
- 『資本論』(マルクス) 178, 188, 189-92, 209,
210-11, 222, 224

- 第三卷 188, 206, 217, 222
 第二卷 188, 217, 222
 社会化 99
 社会改革運動 14, 15, 17, 20, 34-36, 39, 40, 63,
 88, 239, 253, 264-65
 社会改革主義 72, 241, 253-54, 259, 264-66
 社会解体 19-20, 45, 63, 64-65, 71, 81, 82-83,
 88, 106, 107-108, 112, 142-43, 164, 200-201,
 264
 ——論 20, 34, 40, 45, 70, 152, 256
 社会解体-再組織化 19-20, 45, 71, 81, 88, 142-
 43, 200-201
 社会学 1, 243
 社会構成理論 158, 164, 170, 171, 232
 社会体系 97-99, 100-101, 127
 社会調査運動 14, 63, 254
 社会調査学会 119, 248, 250-51
 『社会的行為の構造』 92-96
 ワースの書評 95-96
 社会的ネットワーク分析 153-54, 171
 社会的分業 30-31, 75, 79
 社会統制 (構造-機能主義) 99, 104, 106, 117
 社会統制 (シカゴ学派) 33, 36-37, 56-57, 106,
 254, 257, 266
 ジャノウィッツ, モリス 139-43, 156, 245,
 252
 『都市環境におけるコミュニティ新聞』
 139-42
 主意主義行為理論 92-96
 集合行動 32, 59, 81, 103-105
 集合行動理論 32, 103-107
 価値付加過程 104, 105
 社会統制 106
 集合的消費 204-206, 207, 231
 修正シカゴ学派 4, 139-152, 170, 171, 241
 重層の決定 197
 住宅地帯 41, 43, 44
 集中化 (人間生態学) 45
 醜聞暴露ジャーナリズム 14, 63, 254
 シュッツ, アルフレッド 127-28
 シュトラスブルク大学 25 →シュトラスプ
 ル大学も見よ
 準拠集団理論 102
 ショウ, クリフォード 65, 66, 112
 状況の定義 19-20, 56, 65, 71, 73, 88, 108, 112
 少年非行 47, 57, 60, 65-66, 112
 情報的發展様式 181n, 208
 ショパーク, ギデオン 85-86
 ジョンズ・ホプキンス大学 15, 16, 26, 209
 事例研究法 53, 54, 56, 57, 73-74, 107, 108
 人種 60-61, 75, 112, 135, 137, 146, 147, 158,
 264
 ——問題 27, 30, 87, 138, 140, 144, 225, 260
 新自由主義 53, 181, 210, 223-24, 227, 260, 266
 侵入 (人間生態学) 44-45, 64, 88, 131
 『シンボリック・コミュニティ』 147-52
 コミュニティ組織 151, 152
 シンボリックな定義 150-51, 152
 生態学的分析 147-49, 151
 シンボリック相互作用論 90, 113, 114, 127-28,
 245, 253, 257-59
 『人民の選択』 109-111, 264
 ジンメル, ゲオルク 25, 27, 40, 77, 79, 88
 推移地帯 41, 42, 43, 44-45, 55, 62, 65, 69
 隙間集団 59, 60, 61, 72
 隙間地域 59, 60, 61, 107
 スターリン主義批判 174, 175, 176
 スターリン批判 (ソ連共産党第20回大会にお
 けるフルシチョフ第1書記の秘密報告)
 175, 186
 ストウファー, サミュエル 73, 102, 108, 112,
 121, 244
 ストラズブル大学 176 →シュトラスブ
 ルク大学も見よ
 『ストリート・コーナー・ソサエティ』 82-
 83
 ズナニエツキ, フローリアン 19-20, 72
 スペンサー, ハーバート 16, 22, 280
 スポットマップ →地点地図を見よ
 スミス, デニス 253
 スメルサー, ニール 98, 100, 101
 経歴 103
 集合行動理論 103-107
 スモール, アルビオン 15, 20, 22-23, 27, 52,
 67, 249, 253, 257
 経歴 16-18, 24
 スラッシュャー, フレデリック 58-62, 65, 66,
 72, 107
 スラム 14, 42, 62-63, 64, 65-66, 82-83, 87, 112
 生活周期段階 84 →家族周期段階も見よ

- 生活様式としてのアーバニズム 24, 74-82
 →ワースも見よ
 空間的凝離 77, 79
 ——と産業主義 83-84, 86
 ——と資本主義 83-84, 86
 従属変数に関する批判 82-83
 政策的含意 87
 ——と大衆社会論 79-81
 定義 76
 独立変数に関する批判 83-85, 201, 206-207
 都市化 85-86
 都市の定義 74-76
 理論構造 74-76
 生産様式 181*n*, 195, 208
 政治的審級 194, 196-97, 204
 政治マシン →マシン政治を見よ
 生態学的決定理論 158, 164, 170, 171, 232
 生態学的相関 4, 56, 90, 107, 111-12, 255
 ——の誤謬 56, 111-12, 255
 セクター理論 131-32, 137, 256
 世間ずれ 79, 81
 折衷主義 125, 127, 236, 238, 262
 セツルメント 14, 15, 22, 63
 遷移 →継承を見よ
 選挙区政治 145-46
 線形発展モデル 142-43
 前産業型都市 85-86
 「一八四四年の草稿」(マルクス) 174, 175*n*,
 187, 189
 相違に対する寛容 79
 ゴーボー, ハーヴェイ・W. 62-67, 72, 266
- た行**
- 第一次集団 17, 33, 34, 36, 56-57, 72, 144, 146,
 158, 236-37, 138
 第一次的關係 33-34, 35, 82-83, 158
 第一次の接触 79
 大衆社会論 81, 139, 140, 141, 142, 163-64
 態度 19-20, 28-29, 54, 63, 73-74, 108, 121
 ——と価値 19-20, 57, 71, 73, 88, 256
 測定 107, 108
 タイナー, スティーヴン・J. 253
 第二次シカゴ学派 117-18
 第二次集団 36, 57
 第二次的關係 33-34, 35, 36, 83, 239
 第二次的接触 79
 大陸横断鉄道 9, 21, 49
 多核心理論 132-33, 256
 タスキーギ学院 20, 26
 地域コミュニティ 30, 62, 64, 262, 264
 ——と家族解体 56, 58
 ——とギャング 60-61
 システミックモデル 142-43
 持続と変容 139-52 →コミュニティ存続
 論も見よ
 線形発展モデル 142-43
 ——の変動 44-45, 147-49
 地域コミュニティ区域(シカゴ) 48, 73, 140,
 143, 147-52
 地域コミュニティ調査委員会 48, 66, 73, 74,
 88, 107, 131, 249
 父親中心の家族地区 54-56
 秩序だった分節化 152, 156, 241*n*
 地点地図 48, 73
 チャイナタウン 30, 42, 54
 中範囲の理論 102
 通勤者地帯 42, 43, 44
 ディア, マイケル 246, 260-61
 帝国主義 222-23
 テイリー, チャールズ 154
 デトロイト 83, 154
 デューイ, ジョン 15, 23, 25, 26, 47, 96, 257,
 258, 259*n*
 デュルケム, エミール 20, 47, 77, 79, 92, 93-
 94, 161
 テンニエス, フェルディナント 47, 99, 142,
 155-56, 157, 229
 ドイツュラント 43, 46, 69
 東欧系ユダヤ人 11, 42, 68 →ユダヤ人も見
 よ
 統計的方法 54, 73-74, 108, 255
 ——と都市生態学 130-33, 137
 同心円地帯理論 40-46, 65, 71, 88, 256
 ——と家族地区 54-56
 居住移動 44
 社会移動 44
 道徳地域 38-39, 164, 165, 172
 都 市
 定義(フィッシャー) 159
 定義(ワース) 74-76

パーク 27-40
都市イデオロギー 86, 185, 200-203, 206,
都市化 85-86
シカゴの—— 9-14
資本主義のもとでの—— 210-11 →資本
の第二次循環も見よ
生活様式の—— 85
都市革命 182, 225-26
ハーヴェイ 223-26, 227
ルフェーヴル 177-83, 184-86
都市化論争 85-86
都市計画 87, 181, 202, 206
ルフェーヴル 178, 181, 182, 184, 185
都市システム (カステル) 203-204, 206, 207
都市社会 (ルフェーヴル) 178-80
都市社会運動 (カステル) 206, 207
都市社会学 2, 5, 24, 28, 74, 79, 81-82, 128,
129-30, 227, 231-32, 240-41, 245
カステルの批判 200-202
都市生態学 130-38 →人間生態学, 同心円
地帯理論も見よ
因子生態学 136-38, 147-49
——の限界 138
社会地区分析 134-36
セクター理論 131-32, 137, 256
多核心理論 132-33, 256
文化的生態学 133-34
都市的生活様式 →アーバンイズムを見よ
都市的なもの 180, 181, 182, 184-85, 200, 203,
231
都市度 159
——と下位文化への関与 169
——と親族ネットワーク 166-67
測定 165, 170
——とパーソナル・ネットワーク 165-69
——と友人ネットワーク 168-69
——と隣人ネットワーク 167-68
都市プロブレマティック 178, 179, 184-85
都市への権利 227, 260, 266
ハーヴェイ 225-26
ルフェーヴル 182, 186
土台と上部構造 194-96
トマス, ウィリアム・I. 18-20, 26, 71, 88,
120, 142, 249, 258
経歴 18, 21

ドラマツウルギー 90, 115-16

な行

仲間集団社会 83
ニア・ノースサイド (シカゴ) 62-67, 134
ニューヨーク 7, 8, 87, 261, 262, 263
人間生態学 45, 88, 122-23, 128, 130-31
継承 44-45, 64, 88, 131
支配 44-45, 88, 131
集中化 45
侵入 44-45, 64, 88, 131
遷移 →継承を見よ
分散化 45
優占 →支配を見よ
認識の対象 (アルチュセール) 191-93, 233
→理論の対象 (カステル) も見よ
認識論的・イデオロギー的の再帰性 237, 238,
239, 240, 241
ネオ・マルクス主義 85, 138, 173-227
ネットワーク分析 →社会的ネットワーク分析
を見よ
ノースエンド (ポストン) 82-83, 134

は行

ハーヴェイ, デヴィッド 208-227, 233-36,
265-66
過剰蓄積 215, 217-18, 220-21, 222, 226
空間的・時間的解決策 (ハーヴェイ) 215,
221, 222, 223, 226
経歴 209
建造環境 210, 219, 220, 221, 222, 226, 234
資本の第三次循環 222
資本の第二次循環 218-22
都市革命 223-26, 227
都市への権利 225-26
略奪による蓄積 222-23
ハーヴェイ, リー 246, 252-59
バーク, ロバート 20-21, 71, 88, 120-21, 164,
225, 239, 249
——とアンダーソン 52, 53
経歴 24, 25-26
——とジンメル 27
「都市」 27-40
——とバージェスの指導体制 47-48
——とヒューズ 119, 121

- パークレー →カリフォルニア大学パークレー
 校を見よ
 バージェス, アーネスト 26, 47, 71, 88, 89,
 108, 249
 —とアンダーソン 52, 53
 —と『家族解体』 58-59
 経 歴 21, 40, 89
 —と地域コミュニティ区域 48, 73, 150-
 51
 「都市の成長」 40-46
 パース, チャールズ 26
 パーソナル・ネットワーク 165-69
 親 族 166-67
 定 義 165
 友 人 166, 168-69
 隣 人 166, 167-68
 パーソンズ, タルコット 39, 90-101, 114, 127,
 164, 244
 AGIL 図式 100-101
 経 歴 91-92
 『社会体系論』 97-99
 『社会的行為の構造』 92-96
 パターン変数 98-99
 —とワース 95-96
 バーナード, ルーサー・L. 250
 ハーパー, ウィリアム・レイニー 14-15, 16,
 17, 22
 ハーバード構造主義 152-155
 —とシカゴ学派 171-72
 ハーバード大学 25, 26, 89, 90, 91-92, 108,
 112-13, 152-55, 244
 社会関係学科 98, 126
 ハイデルベルク大学 25-26, 91
 ハイドパーク (シカゴ) 14
 パターン変数 (パーソンズ) 98-99
 パネル調査 109, 110, 111, 264
 母親中心の家族地区 54-56
 バプティスト 14, 16, 22
 バリ・コミュニオン 176-77, 184, 224, 226
 ハリス, チャウンシー 132-33
 パリ第10大学 (ナンテール) 176, 177, 182,
 199
 ハルハウス 14, 15, 18
 バルマー, マーチン 246, 254, 255, 259n
 バレート, ヴィルフレッド 93
 ハンター, アルバート 139, 147-52, 156, 245
 ビーコンヒル (ボストン) 133, 134
 『ピーブルズ・チョイス』 →『人民の選択』を
 見よ
 控えめな態度 79
 比較都市社会学 85-86
 非家族地区 54-55, 137
 ビックヴァンス, C. G. 229, 232-33, 245
 ヒューズ, エヴエレット 74, 88, 89, 108, 114,
 117, 127, 249-50, 251, 252
 —とパーク 119, 121
 ブルーマー=ヒューズ・トーク 118-26,
 128
 平等家族地区 54-56
 比率地図 48, 73
 ビルゼン (シカゴ) 42
 ファイアレイ, ウォルター 133-34, 138, 150
 フィッシャー, クロード 158-72, 185, 228,
 245
 —とカステル 231-32
 経 歴 155
 フェアリス, エルスワース 21, 25n, 74, 88,
 119, 251, 259n
 フェアリス, ロバート 251, 253, 254, 256,
 259n
 フォークウェイズ 16, 57
 福祉国家 49, 53, 81, 138, 209, 239, 260, 266
 不死鳥 3, 262, 264
 ブラウン, マイケル・E. 228, 236-39
 ブラグマティズム 15, 22, 23, 25, 26-27, 36, 47,
 62, 71, 72, 88, 90, 96, 233, 255, 257, 258, 264
 ブラックベルト (シカゴ) 42, 144
 フランス共産党 174, 175-76, 177, 182, 186,
 198
 『ブルーカラー・コミュニティ』 143-46, 236
 組合政治 144-45, 146
 交渉による結集 145, 146, 238
 人口構成 144
 生態学 143-44
 選挙区政治 144-45, 146
 第一次集団 144, 146, 236, 238
 地域構成 143-44
 マシン政治 145, 146
 民族・人種関係 144
 ブルーマー, ハーバート 20, 74, 88, 89, 104,

108, 111, 113-14, 127-28, 244, 245, 254, 257-58, 259
 —とパーク 119-20
 ブルマー=ヒューズ・トーク 118-26, 128
 ブルマン 13-14
 フロイト, ジークムント 97
 プロブレマティック 178, 189, 200-201
 革命の— 241, 265
 社会改革の— 241, 259, 264, 265-66
 社会統合の— 200-201
 中範囲理論の— 237, 239
 都市の— 178, 179, 184, 185
 文化的生態学 133-34, 138
 分散化(人間生態学) 45
 米国社会学会 18, 88-89, 244, 260
 ヘイ・マーケット事件 13
 ベースマップ →基礎地図を見よ
 ベッカー, ハワード・S. 116-17, 122-23, 254, 256
 ベル, ウェンデル 135-37
 ベルリン大学 25
 弁証法的唯物論(唯物弁証法) 187, 189-92, 194, 197n
 ベンスマン, ジョセフ 228, 236-38, 239, 240, 242
 ヘンダーソン, チャールズ 16, 20, 22, 23, 249, 257
 ホイト, ホーマー 131-32, 137
 『ホーボー』 48-53
 ポーランド人 11, 18-20, 22, 145
 『ポーランド農民』 →『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』を見よ
 ポストモダン・アーバニズム 260-61, 262
 ボストン 133-34
 ウェストエンド 83, 87
 ノースエンド 82-83, 134
 ビーコンヒル 133, 134
 ボストンコモン 133-34
 ボストンコモン 133-34
 ホップズ, トマス 92-93
 ボヘミア 54, 62, 64
 ホボヘミア 42, 48-49, 50, 52, 54, 63
 ホワイト, ウィリアム・F. 82-83, 156, 241
 ホワイト, ハリソン 153-55

ま行

マーシャル, アルフレッド 93, 95
 マートン, ロバート 90, 98, 101-103, 109, 112, 244
 アノミー理論 102-103
 準拠集団理論 102
 中範囲の理論 102
 マウラー, アーネスト 53-58, 65, 71-72, 107, 137
 マッシュズ, フレッド・H. 253, 256, 259n
 マシン政治 34-35, 40, 60, 63, 67, 72, 145, 146, 239
 マックスウェル街(シカゴ) 43, 69
 マルクス主義 67, 173, 174-75, 184, 187, 188-89, 196, 208-209, 234, 261, 265-66
 ネオ・— 173-227
 ロシア・— 173, 174, 175, 179n, 184, 187, 194, 198, 208, 265
 マルチ・メソッド 256, 258, 259, 262, 264
 マルチ・レベル分析 112, 137n, 171, 255, 258, 259, 262, 264
 ミード, ジョージ・ハーバート 23, 26, 74, 96, 253, 257, 258, 259n
 ミシガン大学 17, 25, 26, 257
 ミルズ, C. ライト 99, 111
 無関心 79
 メラー, ローズマリー 228, 229
 メリアム, チャールズ 257
 モーレス 16, 34, 36, 40, 57, 63
 モロッチ, ハーヴェイ 139, 239, 241n, 260, 261, 266

や行

唯物弁証法 →弁証法的唯物論を見よ
 有限責任のコミュニティ 141-42, 151, 152
 優占 →支配を見よ
 ユーロ・コミュニズム 199, 206, 207
 ユダヤ人 67-71
 西欧の— 68
 東欧の— 68 →東欧系ユダヤ人も見よ
 『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランド農民』 18-20
 世論 36-37, 64, 104, 106, 254

ら行

- ラウマン, エドワード 154-55
ラザースフェルド, ポール 90, 114, 244
経歴 101-102, 109
『人民の選択』 109-111, 264
ラテン街 42 →ボヘミアも見よ
ラベリング理論 90, 116-17, 256
リースマン, デヴィッド 114, 142
離婚率 54, 56, 58, 107
リトル・イタリー →リトル・シシリーを見よ
リトル・シシリー 30, 42, 54, 63, 65
理念主義 92, 94
略奪による蓄積 (ハーヴェイ) 222-23
流動的大衆 81
量的データ 72-73, 142
理論的实践 (アルチュセール) 190-93, 198, 200, 233, 234
理論的对象 (カステル) 201-202 →認識の
対象 (アルチュセール) も見よ
ループ 41, 54, 59, 62
ルフューヴル, アンリ 174-86
経歴 174-76, 177
資本の第二次循環 181, 184, 185
スターリン主義批判 174, 175, 176
都市革命 177-83, 184-86
都市計画 178, 181, 182, 184, 185
都市社会 178-180
都市的なもの 180, 181, 182, 184-85
都市プロブレマティック 178, 179, 184-85
都市への権利 182, 186
パリ・コミュニケーション 176-77, 184, 224
レイトマップ →比率地図を見よ
レインウォーター, リー 153

- 労働者居住地带 41, 42-43, 44, 55, 69
『ローカルコミュニティ・ファクトブック』(シ
カゴ) 131, 138, 151
ローラ・スベルマン・ロックフェラー記念財団
48, 88, 243, 248-49
ロンデル地区 (シカゴ) 43, 69
ロサンゼルス 7, 135, 260-64
ロサンゼルス学派 247, 260-64
ロシア・マルクス主義 173, 174, 175, 179n,
184, 187, 194, 198, 208, 265
ロックフェラー, ジョン 14, 22
ロビンソン, W.S. 111-12
ロフランド, リン 118, 119n
ロンドン 14, 30, 132

わ行

- ワース, ルイス 67-71, 74-87
下位文化理論と—— 158, 159, 163-64, 169,
170, 172, 256
カステルによる批判 201, 206-207
ガンズによる批判 84-85
経歴 67, 74, 81, 88, 89, 108, 114
『ゲッター』 67-71 →ゲッターを見よ
再開発計画 87, 113
——と修正シカゴ学派 141, 142, 143, 147,
152
「生活様式としてのアーバニズム」 74-87
→生活様式としてのアーバニズムを見よ
パークと—— 29, 33, 37, 40
——とパーソンズ 95-96
フィッシャーによる擁護 231-32
——とホワイト, ウィリアム・F. 82-83
ルフューヴルと—— 185
ワシントン, ブッカー・T. 26, 36

● 著者紹介

松本 康 (まつもと やすし)

1955年、大阪市に生まれる。

1984年、東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。

名古屋大学文学部助教授、東京都立大学大学院都市科学研究科教授、立教大学社会学部教授などを経て、

現在、立教セカンドステージ大学兼任講師。

元日本都市社会学会会長 (2003年9月～2007年9月)

近著に、『都市社会学・入門』(編)有斐閣、2014年。『再生する都市空間と市民参画』(共編)クオン、2014年。『社会学ベーシックス4 都市的世界』(分担執筆)世界思想社、2008年など。

訳書に、H. ガンズ『都市の村人たち』ハーベスト社、2006年。

松本康編『近代アーバンイズム』日本評論社、2011年。

A. アボット『社会学科と社会学』(共訳)ハーベスト社、2011年など。

「シカゴ学派」の社会学——都市研究と社会理論

Sociology of the "Chicago School": Social Theories and Urban Studies

2021年3月25日 初版第1刷発行

著 者 松 本 康

発 行 者 江 草 貞 治

発 行 所 株 式 有 斐 閣
会 社



郵便番号 101-0051

東京都千代田区神田神保町 2-17

(03) 3264-1315 [編集]

(03) 3265-6811 [営業]

<http://www.yuhikaku.co.jp/>

印刷・株式会社理想社／製本・大口製本印刷株式会社

©2021, Yasushi Matsumoto. Printed in Japan

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

★定価はカバーに表示してあります。

ISBN 978-4-641-17460-3

JCOPY 本書の無断複写(コピー)は、著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に(一社)出版者著作権管理機構(電話03-5244-5088, FAX03-5244-5089, e-mail:info@jcopy.or.jp)の許諾を得てください。